小松島港は、四国東部の紀伊水道沿岸のほぼ中央に位置し、古くから瀬戸内海、紀伊水道に接する四国屈指の天然の良港として栄えてきました。

平安時代には、阿波北部の撫養、南部の咲湊（橘湾）と並んで、中の湊と称され、勝浦川上流から切り出された材木が、水運を利用して小松島津に運ばれていました。十四世紀、瀬戸内海で活躍していた小松島の船は、海賊船と区別するため唐梅の旗を立てており、この由緒から唐梅は昭和九年まで小松島の紋章となっていました。

藩政時代には元根井と和田島に番所が置かれ、小松島浦では藩札の引き受け方や紺屋、藍商人が多く活躍し、江戸や大坂との取引が行われ阿波の商業・金融の中心地として栄えました。

明治になって次第に鉄船が増加するようになると、水深が浅いために入港できないという騒ぎとなり、明治三十二年（一八九九）海上輸送の重要性と町の将来を考え村営で小松島港の改修を実施。これを機に本市は近代的港湾都市への第一歩を踏み出したのです。

小松島港 潮風の記憶

Chapter Ⅱ

小松島港は古くから天然の良港として知られ、江戸時代にはここから藍玉・藍染め物・ミカン・木材が、大坂や江戸へと積み出されていた。

In the Meiji era steel vessels had gradually taken over the role of wooden vessels in marine transportation, and accordingly deep-water ports were required. In 1899 Komatsushima Port was renovated, which made this city take the first step into a modern international port city.

九州から運んできた石炭の荷揚風景（飯原一夫画）、昭和15年に臨港鉄道敷設（昭和60年廃止）